

まちづくり活動の交流の意義
 -世田谷まちづくりファンド助成団体との Participatory Action Research による-

How citywide Machizukuri could be constituted of the small Machizukuri groups.
 —Through Participatory Action Program with the 44 Setagaya Machizukuri Fund 2013 Groups—

時空間デザインプログラム

12M43204 土屋陽子 指導教員 土肥真人

Environmental Design Program

Yoko Tsuchiya Adviser Masato Dohi

ABSTRACT

Grassroots community activities cultivate its people, land and society. The issue we try to see in this thesis is how these activities connect each other and create whole city “Machizukuri”. Through Participatory Action Research (PAR) with the 44 Setagaya Machizukuri Fund 2013 Groups, we have verified our hypothesis of scaling up from small groups activities to larger city wide stewardship recognition. We communicate in various ways to receive the groups’ reflection, like visiting their places and joining to their activities, preparing the workshop that offer an opportunity to make groups communicate each other and the questionnaire directly asking our hypothesis. We find there are several patterns to scale up, though there are small numbers of groups those never scale up for several reasons. We were also able to share the citywide “Machizukuri” vision with the groups as a result of our PAR.

第1章 背景と目的

1-1 研究の背景と目的

現在日本の都市において行政は都道府県及び市町村単位の都市全体についての構想を提示する事が出来る。かつ公共空間の管理及び整備等、生活空間における身近なハード整備も主導している。一方、市民活動によるまちづくりは主に個別の組織単位で活動し、支援制度についても各組織への資金及び技術援助や活動補助が一般的であり、個々の単位でしか行動出来ない事が多い。そこで市民がまち全体について考える重要性及びそのプロセスを明らかにするべきであると考え。その為に個々の活動だけでなく市民が自分達のまち全体について考える仕組みを考察する事とする。対象とした公益信託世田谷まちづくりファンドは、助成による資金援助だけでなく活動グループ同士の交流も重視している。本研究ではファンドが持つ個々の組織が繋がる為の機能に着目し、交流する意義及びまち全体を認識する可能性について調査考察する事を目的とする。

1-2 論文構成と研究方法

本論文の構成を方法論と共に(図 1)に示す。本研究は2013年度まちづくりファンド助成44団体及びまちづくり

ファンド関係者(後述)との Participatory Action Research(以下 PAR)の手法を用いて進める。PARとは「調査者が研究対象の組織のメンバーと、調査の設計からデータの収集と分析を経て、それによる発見内容を実際に適用するまでの全ての調査プロセスに、調査者と被調査者がともに参加し研究する方法」¹である。助成団体と関わり合いながら分析・計画・実行・評価のサイクルを繰り返して進める。(図 1)

第2章 世田谷まちづくりファンドについて

2-1 世田谷まちづくりファンド前史

世田谷まちづくりファンドは、1992年に公益信託制度を用いて設立された基金であり、地域発想に根差した区民主体のまちづくり活動に対して助成する。(財)世田谷トラストまちづくりの前身、(財)世田谷区都市整備公社(委託者)が資金をだし、三井住友信託銀行(受託者)が事業を実施する。ファンド受託者が設ける運営委員会は、毎年の助成事業の進め方及び助成先・金額等受託者に助言・勧告する主体である。助成事業過去20年間の実績を(表 1)に示す。世田谷まちづくりファンドは、全国に先駆けて始まった市民参画型のファンドであり、助成システムに加えて4つの特徴がある。①公開審査会方式による助成決定、②「学びあいうちあう場」としての運営、③区民サポーターによるファンド支援、④個人・企業や行政からの寄付金による基金作り。本論は②に注目していく。

表 1 今年度まちづくりファンド実績

項目	実績
助成件数	517件
助成グループ数	276グループ
助成グループメンバー数	延べ6200人
助成グループ申請総額	1億4928万円
助成総額	1億752万円

2-2 過去に取り組んできた交流

世田谷まちづくりファンドでは、設立当初まちづくり交流部門((93~02)住民主体のまちづくり活動を行うグループ相互の情報交換やネットワーク形成の機会・場を設ける交流活動に対する助成)も設けていた。現在は公開審査会で

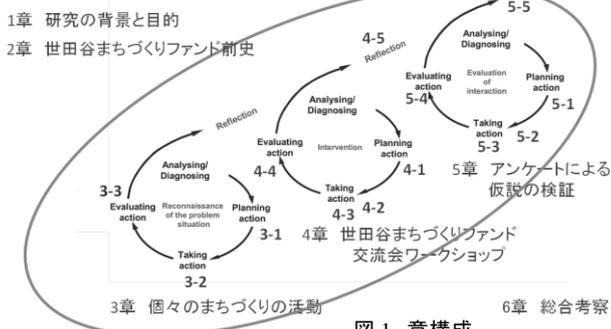


図 1 章構成

表 4 4-3 集計表

テーマ	特徴				協力したい課題
	7	8	7	11	
住宅街	15				
まちの素敵な場所	13		8	2	
商店街	12	11	7	3	3
まちの人々	10	11	8	7	
自然	10	7	8	7	3
歴史	6		2	3	
交通	6	17	5	11	2
足りない施設		6		1	
コミュニティ	13		7		8
防災	6				
まちの変化		11	7	8	
まちの位置				2	
まちへの愛着				1	
農地					4
項目数計	72	82	45	52	20
協力がしたい課題の由来					
共通の課題へ対応したい	9				
自分の地域の課題へ対応したい	5				
					6

第5章 アンケート調査による仮説の検証

—PARの第三サイクル—

5-1 本章の目的と対象

本章は WS に参加した 42 グループに直接仮説 3 を問い、検討してもらい仮説を検証する事を目的とする。ファンド運営委員及びまちづくり広場の協力を得てアンケートを作成した。アンケート概要は(表 5) に示す。

5-2 仮説の検証

各仮説について(①全体としてそう思う。②一部分そう思う。③そう思わない。)と回答項目を設定し回答数を集計した(表 5)。①、②の回答が

表 5 アンケート調査の概要

対象	ワークショップに参加した42団体、約100名 (今年度助成対象44団体内)		
期間	2013/12/18-2014/1/20		
回答数	25団体、31名		
質問項目	・ワークショップSession1-3の結果から立てた仮説1-3に対する賛否・意見(以下に結果記載) ・ワークショップでの感想 ・世田谷まちづくりファンドが企画する交流の場についての意見 ・各自の活動について		
アンケート結果	上記仮説1~3に関する賛否について		
	仮説1	仮説2	仮説3
全体としてそう思う	13	22	16
一部そう思う	13	7	8
そう思わない	3	0	2



図 3 ワークショッププログラム

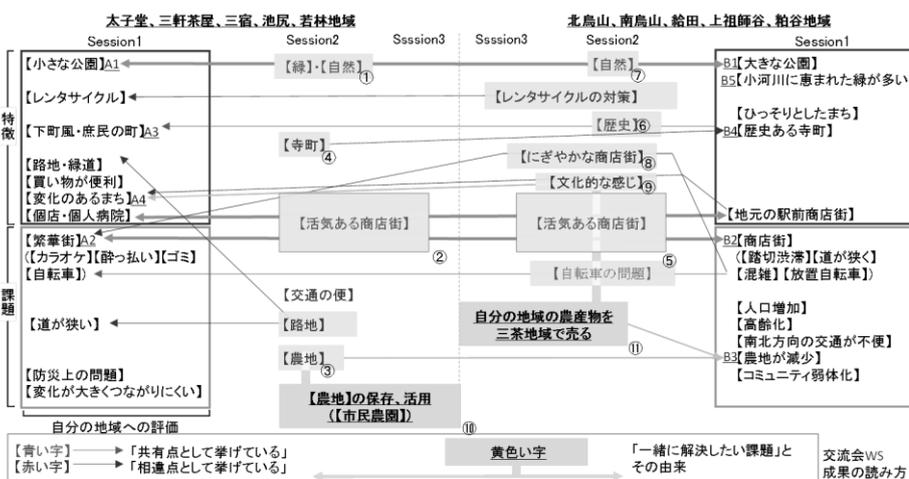
な住宅街等住環境に関する特徴が多く出た。同様に課題は 82 項目あり 8 つのテーマに分類され、コミュニティが弱い等コミュニティに関する課題(13/82)が最も多い。2 地域で共有点は 52 項目あり、交通、商店街、まちの雰囲気等 11 テーマに分類され、交通(11/52)に関するテーマが最も共有されたが、中にはまちへの愛着(1/52)と回答しているグループもあった。相違点は 45 項目あり 7 テーマに分類され、まちの素敵な場所(8/45)、まちの人々との活動(8/45)が最も多い。協力がしたい課題は 19 項目あり(重複分類)、5 つのテーマがあった。中でもコミュニティをテーマにするもの(8/19)が最も多く、世代間交流の場作りや人同士の繋がりが希薄である事への懸念が挙がった。

4-4 地域間の繋がり方

Session3 の協力がしたい課題については、①共通課題に取り組みたい(9 地域)、②相手地域の資源を用いて新たな取り組みを始めたい(6 地域)、及び③自分の課題に取り組みたい(5 地域)のパターンがあった。①及び②は相手地域の特徴・課題を見出し組み合わせる事でつながる事が出来た。③は相手地域との交流によって自分の地域の課題を再認識した事を示している。

4-5 本章のまとめ

4-3 よりどの地域も多様なテーマで話し合う事で自分地域及び相手地域について考えられた事が分かった。4-4 より地域間の繋がり方も明らかになり、これは仮説 2 が成立した事を示している。ここから次章に用いる仮説 3 を得た。



以下の文章中の記号は、上図の記号(①~⑩、A1~A4、B1~B5)に対応する。
 Session1: 三茶地域は7つの特徴と8つの課題、鳥山地域では5つの特徴と10の課題が挙げられた。
 Session2: 三茶地域の共有点は「緑」、「自然」を残す、「活気ある商店街」があることである。前者は両地域の特徴に由来する(①→A1、B1)。後者は両地域の特徴・課題に由来する(②→A2、B2)。相違点は鳥山地域が持つ「農地」、「寺町」を挙げている。前者は鳥山地域の減少として課題に由来する(③→B3)。後者は特徴に由来する(④→B4)。鳥山地域の共有点は「活気ある商店街」、「自転車の問題」がある。「各々の歴史」と「自然」がある事である。「活気ある商店街」は両地域の特徴・課題に由来する(⑤→A2、B2)。「歴史」は三茶地域の「下町風」、「庶民の町」と鳥山地域の「歴史ある寺町」に由来する(⑥→A3、B4)。同様に「自然」も三茶地域の【小さな公園】、鳥山地域の【大きな公園】、世田谷地域の【小川川】に恵まれた【緑の多いまち】に由来する(⑦→A1、B1、B5)。相違点は「レンタサイクル」の取組や【にぎやかな商店街】、【文化的な感じ】という街の雰囲気を挙げている。まちの雰囲気のうち、前者は地域の課題に由来する(⑧→A2)。後者は特徴に由来する(⑨→A4)。
 Session3: 三茶地域の協力がしたい課題の「農地の保存」、「市民農園」の活用は、相手地域の課題を資源として活用したいと考えた(⑩→B3)。鳥山地域の「鳥山の農産物」を三茶地域で売るは、自分の地域と相手地域の資源を使い自分の課題に取り組みたいと考えている(⑪→B3)事が分かった。

図 4 2 地域間でのディスカッション

【地域にあまり関心がない】(緑)からは、地域の特徴と活動を独立に考えている事が分かる。仮説 2 のコメントについて【世田谷の広さ、多様性について】(オレンジ)、【世田谷の特性や多様性を知る重要性について】(赤)は、仮説の『世田谷のまちの広さや多様性を再認識』に対する意見で、前者はこの部分に共感している事が分かった。後者は地域特性や世田谷の多様性に関心を持つだけでなく、それらを認識する重要性も示唆している。仮説 3 のコメントについて【世田谷のまちづくりについての提案】(オレンジ)、【現状・課題について】(赤)は、仮説の『まちの風景、人同士や人と場所…世田谷のまちづくりになっている』に対する意見で、前者は広範囲を意識した繋がりを重視した提案が多く、後者は具体的な現状・課題を示していた。【世田谷でのまちづくりの良い点】(青)は、世田谷

全体でのまちづくりを意識した意見であった。

5-3 本章のまとめ

本章で助成グループに提示した仮説3のうち、仮説1は9割弱(26名/29名)に支持され、その内容は生活者としての日常的な関係から地域内での交流が生まれている事を示している。一方で、1割強(3名/29名)は支持せず、これは、地域内での繋がりよりも、活動テーマに重点を置く意見である。仮説2は全ての人(29名)に支持された。それぞれの地域の特性を理解し、関心を持ち、更にその重要性を指摘する意見がある。仮説3も9割以上(24名/26名)が肯定的に捉えている。世田谷全体の繋がりを意識したという意見、課題はあるが繋がりを実現すべきだという意見がある。否定的な意見(2名)は、行政界に意味はないとするものであった。全体として仮説3は概ね了解され、以下の点が仮説4に引き継がれる。(本論以降のサイクルのための仮説)仮説1: 個々のまちづくりから全体のまちづくりへつながる経路として地域がある。テーマを介して個々のまちづくりから全体へつながる回路も必要である。仮説2: 地域間の繋がりはより強化する。仮説3: テーマ別と地域毎に個々のまちづくりが、恒常的に全体としてのまちづくりに繋がる仕組みが必要である。

第6章 総合考察

本章では各章の仮説及び PAR の成果について考察する。1章では問題意識より仮説1「交流する意義及びまち全体を認識する事の可能性についての検討」を提示し、世田谷まちづくりファンド関係者及び助成団体との PAR の手法を用いる事を提示した。2章では世田谷まちづくりファンドが取り組んできた交流及び今年度交流について見ていき、世田谷まちづくりファンドが模索する「交流」について考察した。3章ではウェルカム懇談会より助成団体の意欲的な交流及び交流の場の必要性を示し仮説1の妥当性を確認した。訪問プロジェクトでは活動現場を訪問し世田谷のあ

表6 交流によって生まれたつながり

知り合いになったグループ	1-2, 2-3, 4-16, 6-41, 9-33, 9-14, 11-36, 11-44, 18-19, 18-42, 29-30, 30-35, 30-まちづくりハウス, 34-41	14のつながり
協働できたグループ	6-18, 9-1声花園, 9-あかね工務, 9-11, 18-22, 30-学芸クラブ, 41-42	7の協働

※(アンケート回答グループ)(回答されたグループ)、グループNoは3章(図2)に対応。グループ名称を記載しているのはファンドOB ※2014/02/03現在

らゆる場所で素晴らしい活動が繰り広げられている事、まちづくり活動の多様性を知る事で、仮説2「個々のまちづくり活動が繋がって大きいスケールでの世田谷のまちづくりを作っている」を得た。更にウェルカム懇談会及びまちづくり活動訪問プロジェクトを通じて、対象となるグループと知り合い PAR の趣旨を理解してもらい、調査基盤を形成する事も出来た。4章では仮説2を基に関係者とプログラムを考案する過程で仮説2を得て、ワークショップを企画した。その結果地域内及び2地域間での交流内容とプロセスを明らかにし、それを基に仮説3を得た。同時に仮説2'を関係者と共有する事で仮説3のフィードバックを得る体制を準備した。5章では、仮説3をアンケートによって直接対象グループに検討してもらった。本章で助成グループに提示した仮説3はほぼ肯定されたが、愛着に繋がる回路の検討は課題として残った。又本研究は PAR を通して適宜調査分析の過程、結果を、対象グループ及び関係者と共有してきた為、その蓄積も成果と考えられる。アンケートの交流会についての質問項目よりファンド交流会によって生まれたグループ間の繋がりを(表6)に示す。

【脚注】

- Whyte, Greenwood, and Lazes, 1989, p.514 ; Whyte, 1990, p.20 より
- まちづくりフォーラムから生まれた公益信託まちづくりファンドを市民サイドから支援するグループ。

【参考文献】

- HESTER Randolph T. (2006), Design for Ecological Democracy, Cambridge: MIT Press. pp.362-385
- MCNALLY, Marcia (2011), "Nature Big and Small; Landscape Planning in the Wilds of Los Angeles", Landscape journal, 30:1-11, pp.19-34
- TSUCHIYA Yoko and DOHI Masato (2012), "Scene Exchanges": as the way of Connecting of Community, People and Place, The 8th International Conference of the Pacific Rim Community Design Network, Green Community Design, Seoul pp.497-502
- 「ファンドが拓くまちづくり」編集委員会(2000)「ファンドが拓くまちづくり」(財)世田谷区都市整備公社まちづくりセンター

Session1: 皆様が様々なまちづくり活動を通してご自分の地域を大切にお世話しているからこそ、その地域の大事な場所、自然の循環、キーパーソン、人々の行動、社会構造などよく熟知し、色々なお話をすることができたのだと思います。

①: 地域のお世話がよくわかります。
 ②: お世話→思って
 ③: お世話とはどういう事でしょうか、なぜ上から目線?
 ④: お世話→お世話とは思いません。大事な活動と思っていて少なくて何か役に立っていたらラッキーです。
 ⑤: お世話ではなく、地域の方たちと協力して作らされていると思っています。
 ⑥: まちづくり活動を通して自分の地域を大切にお世話している→まちづくり、地域を世話しようという意識はないが、よく熟知→生活の場で活動している為、もっとも知っていると知り、又生活を通して更に知る事、感じる事、考える事が多くなると言えると思う。
 ⑦: よく熟知→特に長年住み続けている人(住み継いだと考えている人)がこれに値し、次の世代に引き継ぎたいと考えている様に思えた。
 ⑧: まちづくり以外にも住んでいる、子育てしている事によって知り、繋がる事が出来ている。子育てでまちづくりに参加へのきっかけになっている人多い。
 ⑨: 地域活動をしていることで、お互い「共感」できる部分が多かったり、地域のキーパーソンについては繋がりにしは知りえないことも多いと思うので確かにそういえるけれども、地域における人々の行動や社会構造の理解などについては、活動の無縁とは関係なく、個人個人の興味や学習努力による部分が大変大きいと思うので、一概に地域活動への参加が不可欠は思わない。
 ⑩: グループそれぞれ自分達の住む土地に愛着を持って活動しているが、関心事や視点の違いがあるので地域に全て精通しているとは言えない。

仮説1のコメントの内容

- 「お世話」という言葉に関する意見
- 地域における自分達の活動
- 地域を熟知まではしていない
- 地域との関わり方について
- 地域にあまり関心が無い

①: 地域のお世話を通して→サラリーマンやパートタイマー等の多くの人は極限られた人と極限られた分野で活動をしていて、地域と繋がりはあまり多くないので、地域の特性をあまり意識する事はない。仕事以外で活動し、普段と異なる分野の人と接する事により、自分の住んでいる街を異なる視点から見ると、普段気が付かない社会の仕組みに気づかされる事がある。熟知→防犯、防災等様々な分野で普段からの人と人のコミュニケーションを良好しておくことの重要性が認識されている。特に都市では人間関係が希薄となっており、地域コミュニティの活性化の取り組みが話題となっている。
 ②: 活動場所が自分の住んでいるまちと違う為、活動場所だけは愛着があるが、活動地域全体としては住んでいるまち程愛着は感じられない。
 ③: 私達のグループでは、代々・豪徳寺に住んでいる人が少なく外部から市民活動をしている人が多かった。まちづくりというよりも、地域の中で必要とされている事へアプローチ(オブリガショナル)している人が多かった。
 ④: 自分の地域を大切にお世話している→活動場所と自分の住んでいるところがある。色々なお話をすると近隣の住民から感謝された事や近くの地区会館に来ている人々から声がかかれた事
 ⑤: 人々の行動や社会構造の熟知までは至っていません。
 ⑥: 私達のグループもそうですが、多くのグループは、活動している地域をあらかじめリサーチしたり、その特性を調べて活動しているというよりも、自分達のやりたい事をやる場所で行っているという側面の方が強いように感じます。自分達の活動そのものに関する関心の方が地域に対する関心よりもはるかに強いのでは?
 ⑦: ①: 川川水に関する貴重な情報を得る事が出来ました。

Session2: この地域間発表では自分の地域ではないけれども、相手地域でも同じ様に人々が大事にしている場所やもの、こと、風景があることを実感されたと思います。ご自分の地域と同じ様に愛着を持って地域のお世話をされている相手地域のことを知って、世田谷のまちの広さや多様さを再認識されたのではないのでしょうか。

①: 街の広さ、多様性。
 ②: 世田谷は広いが、抱えている課題も同じ; 又は近しいものがある事が分かり、親近感を覚えました。
 ③: 世田谷の広さ、エリアによって異なる特性を知る事が出来たと面白かった。
 ④: 同じ世田谷なのに、それぞれ特性が違っている事を知って面白かった。
 ⑤: 北沢、羽根木などは街の再開発でまちづくりに参加している人が多い。等々力辺りはそうではないが、まちづくりに参加している人が多かったのが興味深い。似ているところ(住宅地)と違うところ(庶民的おしゃべり)を認識できた。
 ⑥: 仮説2のコメントの内容
 ●世田谷の広さ、多様性について
 ●世田谷の特性や多様性を知る重要性について

①: 世田谷区全体でそれぞれの地域特性を認識しつつ、その価値を継承してゆく様な仕組みをプランニングするのが大切であると思った。
 ②: 世田谷は広く、人口も多いので、多様な地域で多様な活動をしているグループを知る事はとても有意義だと考えます。(活動計画を組む上で)
 ③: 相手の地域の事も知って、世田谷の多様性を再確認→他の地域に対して思い描いているイメージとは別にその地域で日常生活を送っている人達から見たその地域の課題がある事に気づかされた。地域と地域の交流を進める上でも人と人の交流同様自分の地域の特色を知るとともに相手地域の特色を知り、その違いを理解する事が大切だと思う。
 ④: 自分の地域に持っているか、そこが定かでないのでもありピンとは来ませんが、まあそう言われればそうかなという感じ!
 ⑤: 無: 地域の評価はその土地で活動している人たちがまたま行ったことである他の地区の人では印象、評価は違いがある。短時間のワークショップの報告を聞いてその地域の認識を固定させてはいけないと思った。

Session3: その多様な活動が集まることで世田谷の街を作りあげられており、そのことが大きいスケールでのまちづくりとなっているのではないかと考えています。世田谷のあらゆる地域で、その地域の人々の為に活動しているグループが沢山あり、そこでも風景、人同士の関係と場所との繋がりが積み重ねられ、繋がりが通って世田谷のまちづくりになっていると思います。

①: 各グループの活動成果を世田谷区全体にどの様な形で広げてゆくかがテーマになると思った。
 ②: 個々の自分達の街で自分達の方で街を作る事の積み重ねが大切(行政任せでない)
 ③: 繋がり合って→それぞれの活動で手一杯になってしまいがちなのが現状ではないか。と思うが、色々なグループの活動や世田谷の環境をもっと知り、資源として活用できるようにすることで繋がりが通ってまちづくりになると思う。
 ④: そうなっていないが、まだまだの感。ネットワークと推進する仕組みが必要。
 ⑤: ただまちづくりに参加していない人も多数いるので、どう包摂していくかも課題かも

仮説3のコメントの内容

- 世田谷のまちづくりについての提案
- 現状・課題について
- 世田谷でのまちづくりの良い点

①: 人同士や人と場所との繋がりが、世田谷のまちづくり活動しているグループのほとんどが活動資金の工面に悩んでおり、今回参加したグループも世田谷区の助成金受給が契機となっている。グループ同士で共同で行う活動できればそれが最も好ましいけれども、活動地域も主旨も異なるのでなかなか難しい。
 ②: 世田谷は地域活動が活発です。活動団体が繋がりが合い協力できるまちづくりを目指している。世田谷は兼敵な区だと思います。
 ③: 実際に顔見知りの方がいるという方もいたようです。共感した方向性が名刺交換をしたと輪が出来てきた空気を感じました。
 ④: 主観的に地域の為にと思って活動しているも、地域の人達から評価されない場合があるが、どんな活動でもそれが継続される輪が広がる努力を続けることが世田谷のまちづくりの基盤になっていると思う。
 ⑤: まちづくりにするこの言葉を定義する事が必要ではないかと感じます。主眼であるこの言葉の意味するところが曖昧なので、このアンケートを通じて明確に答える事を難しく感じます。
 ⑥: 松原は杉並、渋谷区と近接しているが区界で分断している。行政区に関わらず、近接地域との連携を図りたい、図るべき。

図5 仮説のコメント分析